

第 57 回 日米学生会議 日本側報告書

---

## 目次

<b>序章</b>	<b>日米学生会議概要</b>	<b>3</b>
	日米学生会議の歴史 日本側実行委員長挨拶 アメリカ側実行委員長挨拶 内閣総理大臣からのメッセージ 本文中の略語について	
<b>第1章</b>	<b>第57回日米学生会議概要</b>	<b>9</b>
	テーマ 概要 参加者一覧 メディアへの掲載	
<b>第2章</b>	<b>事前活動</b>	<b>17</b>
	春合宿 勉強会 防衛大学校訪問	
<b>第3章</b>	<b>本会議・サイト活動</b>	<b>25</b>
	滋賀・京都 広島 沖縄 東京	
<b>第4章</b>	<b>本会議・分科会活動</b>	<b>47</b>
	1 文化——伝統とポップ 2 ジェンダーとアイデンティティ 3 社会変動と政策 4 安全保障と平和構築 5 地域主義 6 世界市場経済と日米社会の再編成 7 科学技術と社会 8 グローバリゼーションの功罪	
<b>第5章</b>	<b>参加者の声</b>	<b>73</b>
<b>第6章</b>	<b>第57回日米学生会議概要</b>	<b>105</b>
<b>第7章</b>	<b>日米学生会議に ご協力いただいた方々</b>	<b>111</b>

## 序章

# 日米学生会議概要

日米学生会議の歴史

日本側実行委員長挨拶

アメリカ側実行委員長挨拶

内閣総理大臣からのメッセージ

本文中の略語について

## 日米学生会議 70 年の歩み

### 初期の日米学生会議（1934～1940 年）

日米学生会議は、1934 年満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、彼らは「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念を掲げ会議創設に努めた。当時の学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも 4 名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢 99 名の米国代表を伴って帰国した。こうして第 1 回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第 2 回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後 1940 年の第 7 回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

### 戦後の日米学生会議（1947～1954 年）

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953 年までは日本のみでの開催となった。翌 1954 年、戦後初の米国開催として第 15 回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は 1955 年から 1963 年まで再び中断された。

### 今日の日米学生会議（1964 年～2004 年）

1964 年、OB/OG からの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第 16 回会議はリードカレッジで開催され、77 名の日本人学生と 62 名の米国人学生が参加した。1973 年の第 25 回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を 1 ヶ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。

日米学生会議は、70 年の歴史において、学生による企画、運営という方針を貫いてきた。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

## 日本側実行委員長挨拶

日本のアニメの素晴らしさについて真剣に語る米国側参加者。コーヒーを片手に Slang を使いこなす日本側参加者。本来、日米学生間の相互理解を目的として 70 年前に創設された日米学生会議だが、グローバル化が進み、留学など海外経験が珍しくない現代では、個人のアイデンティティは「日本」「米国」という国家という枠組みよりも、独自の経験や価値観によって形成されるようになったようだ。そんな世界に生きる私たちの課題とは何か。それは、自分と違う背景を持った人を受容するための想像力と、多様な価値観を許容するための理解力ではないだろうか。第 57 回日米学生会議は、まさに様々な人間がありっただけの想像力と理解力を駆使して創り上げた、非現実的ではあるが非常にユニークな共同体である。

戦後 60 年を迎える今年、第 57 回日米学生会議は”Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership”というテーマのもと、滋賀・京都、広島、沖縄、東京にて、思う存分語り合った。毎日、眠気や疲れと戦いながら、朝から晩まで答えの見えない数々の問題に対して、出来る限り自ら見聞し、感じ、議論することを徹底し、自分達なりのアプローチを熟考した。滋賀・京都では、文化や環境問題の実地的な取り組みについて学び、広島では被爆者のお話や平和教育を見聞しながら平和について議論した。地上戦の舞台となった沖縄では戦争や基地問題について、そして東京では、北京大学から学生を招聘して日中米について議論し、報告会という形での社会発信を目指した。そしてそこで得たものは、日米の役割は何かというわかりやすいコンセンサスではなく、その根幹にある価値観の多様性の発見であり、多様な集団の中での自分自身の価値観の再考、そして成長であった。

第 57 回日米学生会議を終えた今、素晴らしい仲間に出会った喜び、会議で感じた限界に対する無力感、学んだことを行動に移さなければならないという焦り、運営や企画面での力不足に対する反省、答えの見えない諸問題に対する混乱など、様々な感情が混在している。この体験をすべて消化するためにどれほど時間がかかるかはわからないが、この衝撃こそが日米学生会議の意義であり、持続性なのではないかと考える。そして今後、この一ヶ月間で得た相互理解、葛藤、共感などが、今後私たち一人ひとりの人生において揺るぎないエネルギーの源となると信じる。

最後になりましたが、第 57 回日米学生会議に際し、多大なご協力を賜りました後援団体の皆様、様々な形で御賛助下さいました財団・企業の皆様、日本での開催に特にご尽力いただきました立命館大学、沖縄県・糸満市、東京アメリカンセンターの皆様、日米学生会議アラムナイの皆様、限りないご支援を下さった国際教育振興会の皆様、そしてその他様々の形でご支援頂きましたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。



第 57 回日米学生会議実行委員会  
日本側実行委員長 杉田 道子

## アメリカ側実行委員長挨拶



The 57<sup>th</sup> JASC was about “Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership.” For 30 days we met, traveled, discussed, read, debated, thought and toured all in the name of exploration. We visited many significant historical places such as temples, shrines, museums and memorials to learn about the past and what was. All this was part of an attempt to build a common foundation and shared platform of ideas for discussion and learning. It helped provoke sincere thought, consideration and dialogue among delegates across the international boundaries of culture and language. I believe this month has inspired us to look back as well as ahead to better evaluate our present circumstances and future potential.

During such an experience, many of us find it important to ask the question, “What is the meaning of JASC?” This is an important question, but I believe it is best asked from our current point of view—after the conclusion of the Conference. The pace of the schedule is so fast throughout the month that it’s often days, weeks, maybe even months after the Conference ends before reality sets in and we truly realize what we have accomplished. We have done more things in our one month together than many of our peers may ever do in their lives. We may not have ended up with a lengthy document or report that people might browse and hide away on a shelf, but we did establish bonds and have experiences together that will serve greater purpose than any document could, both now and in the future.

Looking back on our last few days together, I recall feeling that the conclusion of the Conference was bittersweet. It was hard to grasp the reality that the work the 57<sup>th</sup> EC was nearly complete. It was even harder to believe that our month together was over and that we would soon be missing our roommates, roundtable members and other JASC friends. Yet, these feelings were also a sign of something positive; that we had succeeded in keeping JASC alive for another year and that we had truly achieved the mission of promoting friendship and mutual understanding between people of our two nations. Although it is great that we were able to have an academic framework for the month, I believe it is the bonds of friendship and the human network that will mean the most to us in years to come.

In one final note, I would like to extend my appreciation to all those that worked to make the 57<sup>th</sup> JASC possible: IEC and JASC, Inc. for their leadership and oversight to ensure the continuation of JASC; my fellow members of the 57<sup>th</sup> Executive Committee for their hard work and endurance to make it through the year; and the members of the 57<sup>th</sup> delegation for their patience, enthusiasm and various efforts to enjoy and improve JASC. Finally, I would also like to offer thanks to all of our alumni and outside supporters who made contributions to our Conference. Without their donations of time, funds, meeting locations and other important contributions, JASC 57 could not have been so successful. It was truly my pleasure to have met you all and I look forward to crossing paths many of you in the future.

Ashley Neeley

## 内閣総理大臣からのメッセージ

---

第 57 回日米学生会議の開催を、心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議が 1934 年より現在に至るまで 70 年以上にわたり、日米の学生たちの企画・運営により活動を続け、日米の学生の相互理解と友情の促進に寄与してきたことを喜ばしく思います。

本年は戦後 60 年という節目の年に当たります。日米両国は、この 60 年間、政治、経済、文化などあらゆる分野における交流を深めてきました。日米両国は、「世界の中の日米同盟」との考えの下、国際社会が直面する諸問題に対し緊密に連携して対処してきています。その両国の未来を担う若い学生が、約 1 か月間を共に過ごし、様々な活動を通じて、お互いの考え方や文化の違いを知り、その上に立って相互理解を深めることは大変有意義であると考えます。

本年の日米学生会議は、「共に創る明日～戦後 60 年を今日振り返る～ Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership」というテーマを掲げています。これまでの日米両国の歩みを振り返り、未来の日米関係のあるべき姿、また国際社会における共通の問題への両国の取組について議論をすることは、必ずや皆さんの将来にとって有益なものとなるでしょう。

この会議が、実り多いものとなり、皆さんが末長い友情を育まれることを期待します。

内閣総理大臣 小泉純一郎

## 本文中の略語について

日米学生会議では参加者が日常的に用いる略語及び慣用語があり、本文でもしばしば登場しています。以下、一覧にしますので、お読みになる際の参考になさってください。

JASC：「日米学生会議／Japan-America Student Conference」の略。

JASCer：「日米学生会議参加者」の意。

JASC, Inc.：アメリカ側主催者 “The Japan-America Student Conference, Inc.” の略。

EC：「実行委員会」または「実行委員／Executive Committee」の略。

デリ：「参加者／delegation」の略。

ジャパデリ：「日本側参加者／Japanese Delegation」の略。

アメデリ：「アメリカ側参加者／American Delegation」の略

アルムナイ：「日米学生会議のOB/OG」の意。

サイト：「本会議開催地」の意。第57回会議では滋賀・京都、広島、沖縄、東京がこれにあたる。

テーブル：「分科会／Round Table」の意。

JRT：本会議中のプログラムの一つ、「ジョイントラウンドテーブル／Joint Round Table」の略。

CWD：本会議中のプログラムの一つ、「全体討論／Conference-Wide Discussion」の略。

ST：本会議中のプログラムの一つ、「スペシャルトピック／Special Topic」の略。

リフレクション：本会議中のプログラムの一つ、「反省会」の意。